



三宮 麻由子

虚心坦懐に聞く耳を

巻頭エッセイ

ある中学校で特別授業をした後、生徒の感想が送られてきた。ところが、そのほぼ全部が「感想」ではなく「評価」の文章だったので愕然とした。

「(三宮)先生の世界に触れるという、目標は達成できました」

「先生が、私の質問に素直な気持ちで答えた」ので嬉しかった」

「先生は、難易度の高いピアノの曲を演奏し、そのクオリティは高かった」

……内に注目してほしい。これは、感想ではなく評価の表現で、少なくとも教えられる側が教え手に対して使う言葉ではない。ただそれは、生徒本人の言葉というより、いつも先生から言われている言葉をそのままに適用しただけのように読めた。実際子どもたちは非常に純粹で、心を開きましようという、質問しながら泣き出してしまいうささいだ。その子たちが、感想を求められると「評価言葉」で話してしまうのだ。先生方は、生徒を褒めようとするあまり、無意識のうちに絶えず「評価する」言葉をかけ続けることの影響の大きさをあらためて考えていただきたいと痛感した。人生で一番

素直に人の言葉を吸収できる時期に、謙虚な言葉でなく評価し合う言葉をかけられ続けられ、子どもたちの心は「聞く」心でなく「評価する」心に育ってしまっただろう。

いま学校では、学習過程や結果について「評価」することを求められると聞いた。新たな目標を見つけたりそれまでの学習方法を軌道修正するためには、たしかに振り返りが必要だろう。

だが客観的な評価は、ある程度自己が確立し、学問や実生活でのスキルが完成して初めて可能になるものではないかと思う。そのスキルの大きな要素に、自分の頭で考える前に、まずは虚心坦懐に聞くという態度があると私は思うのだ。つまり、自我を一度脇において謙虚になるということである。謙虚になるには自己がしっかりしており、さらに人の言葉を受け入れる心の余裕が要る。謙虚さのない評価や分析は、単なる独りよがりになるだけだからだ。

しかし、感想を書いた生徒さんの多くは、「しちゃった」「○○みたいな」「やっぱ」などの口語を多用し、感想文は文章の体を成してさえいなかった。そこから見ても、客観的な評価ができるほど人格が完成しているとは思えない。そんな段階で評価を求められたら、子どもたちは、謙虚に話を聞く余裕を奪われ、「目標達成」の一言を言うために、先生に評価されるテクニクの熟練に終始してしまいはしないだろうか。一方先生も、目標の達成や過程の分析に目を奪

われて、「評価の連鎖」が生まれているような気がしてしまうのだ。

大学で専攻していたフランス文学の先生が、哲学者ブレイズ・パスカルの「パンセ」を読む授業でこう言われた。

「実る稲穂は頭を垂れるというでしょう？ 謙虚に人の話を聞ける人は、独断に囚われて過ちを犯すことはありません。だからあなた方も、謙虚になることを忘れてはいけません」

この言葉は、いまま私の座右の銘となつている。これを指針にすると、たとえば本の読み方ひとつとつても、「面白い」とか「為になる」という評価で自分の利益になるものだけを探すという読み方はしなくなる。むしろ、自分から難しい本に挑戦し、そこから新たな指針を見つけることができるようになる。先生の言葉とはこのように、人の一生を左右するほど重いということを、あらためて意識していただければと思うのだ。

授業のなかで、先生自身が、評価の言葉でなく謙虚な言葉を口にするようさらに心がけたなら、生徒の言動はきっと変わってくることだろう。

さんのみや まゆこ エッセイスト。最新刊「空が香る」(文芸春秋)。書道で個展を開催。講演、演奏、ワークショップなど多方面で活動。